

かたりべ116

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

夏の收藏資料展「戦争を考える夏2015」開催中!

8月30日(日)まで

★展示みどころ解説

7月25日、8月22日 午後2時〜40分間

郷土資料館では、一九八四年の開館以来、戦争体験を掘り起し、語り継ぐため、戦時中の区民生活や空襲、集団学童疎開などをテーマに展示会を行ってきました。戦後七〇年を迎え、各地で記念事業が行われていますが、当館では今年も、寄贈資料を中心に「戦争を考える夏」を開催します。戦争体験者が年々減少する一方、戦後七〇年の節目に、家に遺された戦争関係資料を活用してほしいと寄贈してくださる方が増えています。

左の写真は、区の約七割が焼失した昭和二〇（一九四五）年四月一三日の城北大空襲の被災状況を写した貴重な写真です。提供者の上野誠氏の調査によれば、撮影年は昭和二二年夏と推定され、西栗鴨三丁目（現一丁目）の再建した祖父宅から見える風景を、誠氏の叔父がカメラに収めました。①は北側の滝野川方面を写した写真で、手前の折れた煙突は城北第一栄養食配給組合のものと思われる。右奥には大畑伸銅所の四本の煙突が見えます。②は南側の大塚方面を写した写真です。戦後一年が経っても再建した家はほとんどなく、一面焼け野原が続く光景に改めて衝撃を覚えます。



①



②

今回の展示では、昨夏に紹介した上野眞氏の町会関係資料や防空演習写真（本誌一二二号参照）に引き続き、新たに寄贈された上野家の戦中・戦後の資料のほか、スガモブリズン関係や集団学童疎開関係の初公開資料を中心に紹介します。戦後七〇年を機会に、改めて戦争と平和について考えるきっかけになれば幸いです。

（郷土 横山）

5月7日オープン！ 庁舎まるごとミュージアム 3分野展示のご案内



豊島区では、旧平和小学校跡地（千早二）に、（仮称）芸術文化資料館と図書館、区民事務所などの機能を備えた（仮称）西部地域複合施設の開設準備を進めてきました。残念ながら新館建設は二〇二〇年の東京オリンピック後に延期となりましたが、郷土資料分野を担う「郷土資料館」と、美術分野と文学・マンガ分野を担う「ミュージアム開設準備グループ」は開設に向けて準備を進めています。

●庁舎まるごとミュージアム

去る五月七日、豊島区新庁舎（南池袋二）開庁と同時に「庁舎まるごとミュージアム」がオープンしました。「集い、見て、楽しむ新庁舎」をコンセプトに、三階から九階までの回廊状の通路（約二〇〇m）を利用して、豊島区の文化や歴史遺産、自然など区の魅力を紹介するとともに、「開かれた区政の情報センター」として、豊島ブランドや重点施策地域の文化活動などをわかりやすく、かつタイムリーに情報発信する空間として注目を集めています。今回、新館開設イベントの一環として、「庁舎まるごと

とミュージアム」の三階・四階（一部）・九階を利用して、新館準備のPR展示を行うことになりました。これまで三分野が収集してきた作品資料や調査研究の成果を、寄贈者やご遺族、関係者の協力を得て、パネル等で紹介しています。

●豊島区ナビ

さらに、大画面のタッチモニターで、選択した画像を自由自在に拡大・縮小して鑑賞することができる「豊島区ナビ」を、三階・四階・五階のエレベーターホール脇に設置しています。現在、絵画作品一〇〇点、浮世絵三六点、地図二三点、国土地理院空中写真二点を登録しています。ふだん肉眼では見ることが出来ない絵の細部を大きくすることで、様々な情報や新しい発見を得ることができま



す。ぜひ画面にタッチして作品資料

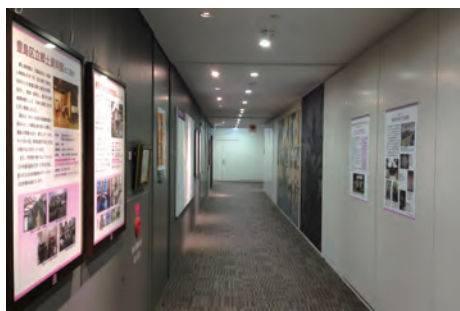
料の魅力をお楽しみください。

続いて、三分野の展示をご案内します。

●郷土資料分野

三階では、郷土資料館（一九八四年開館）と、雑司が谷旧宣教師館（一九八九年開館）の紹介とともに、区内の史跡や文化財、旧河川や旧道を図示した「史跡マップ」を展示しています。また地域の歴史をより詳しく紹介するコーナーを設け、年三、四回展示替えをします。第一回は「雑司が谷編」として、「未来遺産

2014」に登録された「雑司が谷がやがプロジェクト」の紹介のほか、「雑司が谷の文化遺産」「雑司が谷の歴史Q&A」「江戸名所図会」の世界」約八〇年前の雑司が谷」のパネル展示をしています（八月二七日まで）。三階・四階の北壁に浮世絵を拡大した展示



も好評です。三階は江戸名所の雑司ヶ谷鬼子母神詣と神田川・面影橋を題材とした浮世絵を、四階は駒込・巣鴨の園芸（菊造り）を描いた浮世絵を紹介しています。ぜひその迫力を体感してください。九階は、議場の長い通路を利用した長さ約八mの「豊島区年表」が圧巻です。三万五千年前から新庁舎オープンまでの豊島区と日本・世界のおもな出来事を写真入りで紹介しています。

また一九四七・四八年撮影の「焼け跡がのこる豊島区」と、一九六三年撮影の「東京オリンピック前年の豊島区」の国土地理院空中写真は、戦後復興期から高度経済成長期にかけての豊島区の発展の様子を比較しながら楽しむことができます。小・中学校の郷土学習の教材としても、ぜひご利用ください。（郷土 横山）



●美術分野

美術分野では、(仮称) 芸術文化資料館の開設に向けて、「池袋モンパルナス」を中心とする豊島区関連作家や作品の調査・研究・収集を行っています。「庁舎まるごとミュージアム」では、作家の紹介パネルと複製作品とで、これまでの成果の一端をご紹介します。

まず第一回目となる今回の展示は、「池袋モンパルナス」の名づけ親である詩人・小熊秀雄のご紹介から始まります。

一九三〇年代から一九四〇年代にかけて、豊島区には複数のアトリエ村(アトリエ付貸家群)があり、多くの芸術家たちが暮らしていました。アトリエ村から池袋の街に至るまで、芸術家たちが集う街全体の雰囲気は「池袋モンパルナス」と呼んだのが小熊でした。池袋の街を、フランス・パリの芸術家街であるモンパルナスになぞらえて、小熊特有のユーモアと皮肉を込めました。各地から集まった、若く貧しい芸術家とその志望者たちの熱を帯びた空間、それが「池袋モンパルナス」でした。

小熊が友人である画家の寺田政明から絵具を借りて描いたという《夕陽の立教大学》(一九三五年)など、詩人・小熊にしから表現することのできない、かつて

の立教大学の姿をご覧いただきます。

その他、四名の作家をご紹介します。豊島区長崎にあったアトリエ村の一つ「さくらが丘バルテノン」に住み、「アトリエ村の村長さん」と呼ばれた樽松正利、区内のアトリエを転々とした齋藤求と寺田政明、アトリエ村に住む若い芸術家たちに大きな影響を与えた長谷川利行。同期を生きた画家たちはいかに生き、いかなる作品を生み出したのでしょうか。それぞれの異なる個性にご着目ください。

今回の展示をご覧になり、複製ではなく実際の作品を見たい、と思われた方は、ぜひ二〇一六(平成二八)年一月末から開催予定の、三分野合同企画展にお越しください。そして(仮称) 芸術文化資料館が開館した折には、より多くの方々にお越しいただき、実際の作品をご鑑賞いただければ幸いです。(美術 清水)



「池袋モンパルナス」解説パネルと小熊秀雄の紹介パネル、作品3点(複製)を展示するコーナーです。

●文学・マンガ分野

文学・マンガ分野では、豊島区ゆかりの作家や豊島区を拠点とした事象を紹介しています。おもに大衆文学、そして童話や童画、童謡を範囲とする児童文学と、社会風刺やナンセンス、ストーリーを描くマンガの各ジャンルにおいて、戦前から今日までに活躍した作家とその作品、出来事をご紹介します。

例えば、大正一〇年代半ばに台頭した大衆文学を昭和の高度経済成長期とともに支えてきた探偵小説家江戸川乱歩(代表作「怪人二十面相」他)、時代小説家野村胡堂(代表作「銭形平次捕物控」他)、同じく山手樹一郎(代表作「桃太郎侍」他)らが居住し執筆していました。

また、一九一八(大正七)年に鈴木三重吉が主宰し創刊した童話雑誌『赤い鳥』の編集出版の地でもあり、童話作家小川未明や坪田譲治ら、童画家深澤省三ら多くの作家が集まりました。

そして、一九二九(昭和四)年には、現代日本のマンガ文化の礎を築いた代表的なマンガ雑誌『東京パック』(第四次)や『マンガマン』の編集拠点もありました。経験をつんだマンガ家たちによって、後進たちが活動しやすい基盤がつけられたのです。

いずれも、豊島区の文化資産として継承していきたい史実です。

三階通路では、「トキワ荘のマンガ家たち」総勢一七名を大型パネルで紹介。また、ジャンルごとに主なゆかりの作家(小説・野村胡堂、菊池寛、江戸川乱歩、大下宇陀児、山手樹一郎、逢坂剛)、(詩歌・秋田雨雀、柳原白蓮)、(童話・小川未明、鈴木三重吉、坪田譲治、舟崎克彦)、(童謡・三木露風、草川信)、(童画・武井武雄、深澤省三)、(マンガ・永井保、佐川美代太郎、手塚治虫、横山光輝、永井豪)、総勢二二名を常設で紹介しています。ほか

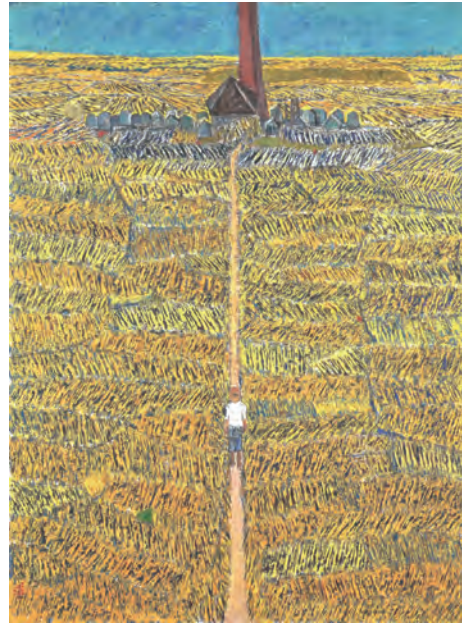
に、スポーツライターと銘打ち、豊島区ならではの視点からではの視点で、文学・マンガの文化史上に残る出来事や作家の紹介を年三回程度行います。ミュージアム開設に向け調査中の公開ではありませんが、作家たちの名前や作品を、多くの方々に知っていただければと思います。



(文学・マンガ 荒川)

作品を見むる

5 齋藤求



齋藤求《火葬場への道》1962年、油彩・カンヴァス、145.3×108.0cm、豊島区蔵

は火葬炉を貫く煙突、だとわかります。周囲に複数個描かれた灰青色と茶色の物体は、お墓と、そこに立てかけられた卒塔婆でしょう。火葬場のイメージを伴う火葬場が、明るい風景と入り混じりながら、一つの作品を構成しています。

黄金色の稲穂の間に行く一本の細い道の上に、白いシャツを着た少年が一人佇んでいます。穂を揺らす風の音に包まれた風景が、遠く地平線の彼方まで広がっています。

この作品の作者は、山形県鶴岡市出身の画家・齋藤求（一九〇七―二〇〇三）です。東京美術学校（現東京藝術大学）入学後、一九三〇（昭和五）年頃から豊島区内のアトリエを転々とし、敗戦後は郷里鶴岡市に居を移しました。そこで描かれたのが《火葬場への道》（一九六二年）です。

そのタイトルから、上部に描かれた三角屋根の建物は火葬場で、長く伸びるの

波であった。稲穂の道を歩くといなゴやバッタが懐に飛び込んできた。場所がどこであったか忘れたが、田んぼの真ん中に赤さびた煉瓦づくりの煙突と墓のある焼き場があった。

私は今でもその風景が忘れられず古里の大事なイメージになっている。

齋藤求「道」、『庄内日報』一九九九年一月一日

火葬場を見たのは、齋藤が小学生の頃のことでした。目に焼き付いた記憶の中にある風景を、それを見た自己の姿とともに、絵という二次元の世界に刻み込んだのです。まるで夢の中にいるかのような不思議で静謐な空間は、現実の風景そのままではなく、記憶の投影であるからこそ生み出されたのかもしれない。

ではもう一つ、齋藤が大切に「道」をご覧いただきました。豊島区長崎にかつてあったアトリエ村の一つ「さくらが丘パルテノン」を描いた《パルテノンへの道》（一九七一年）です。

さくらが丘パルテノンとは一九三六（昭和一一）年頃から建てられたアトリエ付貸家群で、建設以降、アトリエに住むことに憧れた若い芸術家たちが次々と入居していきました。齋藤が入居したのは一九四〇（昭和一五）年頃のことです。



齋藤求《パルテノンへの道》1971年、水彩・クレヨン・インク・鉛筆・紙、25.0×44.0cm、豊島区蔵

黄昏時の空の下、カンヴァスを脇に抱えた人物が、長い影を携えて一人家路についています。向かう先にあるのは、肩を寄せ合うようにして建ち並ぶアトリエです。右端に描かれたのが、齋藤が家族と住むアトリエでした。

火葬場へと続く「道」と、アトリエへと続く「道」。失われた時間と場所に対する郷愁の想いが、風通しの良い、さわやかな風景と共に描かれます。過去と現在とをつなげる「道」として、見る側にも深い余韻を残す二作品です。

（美術 清水）

豊島区ゆかりの作家たち

豊島区には、戦前から今日まで著名な作家たちが居住し、集い、活発な創作活動をしていました。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりの主な作家だけでも百名以上を数えます。ここは、ゆかりの作家ひとりひとりをご紹介しますコーナーです。

童話作家 坪田譲治

【童話作家としてのはじまり】

坪田譲治は、一八九〇（明治三三）年



坪田理基男氏協力
岡山シティミュージアム提供

三月三日、岡山

県御野郡石井村
島田一二五番地
（現・岡山市島田）にランプや

を経営する父平太郎と母幸の次男として
生まれました。
一九〇八（明治四一）年四月、早稲田
大学文学部英文科入学のため上京する
と、小川未明に師事し、文学を学びます。

一九一六（大正五）年、結婚を機に雑司ヶ谷で借家生活をしたのち豊島郡高田町狐塚（現・豊島区西池袋二丁目）に新居を構え三人の息子に恵まれます。

譲治が作家として本格デビューしたのは、一九三五（昭和一〇）年の「お化けの世界」（雑誌『改造』掲載）発表からとされており、四五歳のときでした。以降、「子供の四季」（『都新聞』連載）が新潮社文芸賞受賞、「ねずみのいびき」が野間児童文芸賞受賞など、数々の賞を受賞し、小川未明と浜田広介と並び戦後童話界の三大御所と称されました。

三六歳で初めての童話「正太の汽車」を『子供之友』に発表。その後は池袋モンパルナスの童画家深澤省三の紹介で、一九二七（昭和二）年に鈴木三重吉主宰の児童雑誌『赤い鳥』に「河童の話」を寄稿し、以来三重吉に師事するようになります。早大時代に譲治が師事した未明は、一九二五（大正一四）年に小説家から童話作家に転身することを宣言し同誌に寄稿していたこともあり、『赤い鳥』は、童話作家坪田譲治にとって、子どもたちへの豊かな感性を育む作品創作のための羅針盤であり、感慨深いものだったに違いありません。

【『びわの実学校』とびわのみ文庫】

それを伺わせるのが、童話雑誌『びわの実学校』の存在です。第二の『赤い鳥』をめざし、若手童話作家育成のため、譲治が主宰した同人誌で、三重吉没

後二七年にして、譲治七三歳の年に創刊しました。一九六三（昭和三八）一〇月創刊時の『びわの実学校』編集同人には、坪田譲治、前川康男、今西祐行、大石真、関英雄、水藤春夫、佐藤義美、大川悦生、松谷みよ子、山高登（表紙絵・挿絵）がおり、のちに寺村輝夫、あまんきみこ、宮川ひろ等が加わります。多くの若手童話作家を育てたことでも高く評価され、



『びわの実学校』六〇号 一〇周年記念号表紙
山高登・画

一九七四（昭和四九）年には、創刊一〇年の実績により朝日文化賞を受賞。一九七四（昭和四九）年

第六五号までは、編集・発行を坪田譲治名義でおこなっており、第六六号からは発行元を講談社に移しますが、一九八二（昭和五七）年に譲治没後も一九八六（昭和六一）年一三四号まで発行されました。第六〇号までに確認されているだけでも編集同人含め寄稿者は一六〇名以上、二九〇作品以上が寄稿され、現在も小学校の教科書や単行本として長く親しまれている作品もあります。あまんきみこの「白いぼうし」や、大石真の「教室205号」、松谷みよ子の「モモちゃんトプー」などがあげられます。譲治が子どもたちに読ま



『びわのみ文庫』の看板
藤間栄一氏撮影

後全国的に広まります。このびわのみ文庫二階の部屋で、『び

わの実学校』の編集が行われていました。文庫での活動は、譲治らによる本の読み聞かせや、長男正男とキネ子夫妻による年中行事の開催、子どもや若い母親からの悩み相談など幅広く、「びわのみの子」と呼ばれる子どもたちとともに地域に密着した施設へと成長しました。しかし、その文庫活動も時代とともに終息し、キネ子没後、二〇一二（平成二二）年一月、惜しまれながら、建物は解体されました。現在、文庫での活動を物語る貴重な資料の一部は、譲治の故郷である岡山県の岡山シティミュージアムに保存されています。（文学・マンガ 荒川）

2015年度豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ事業予定 (2015年4月～2016年3月)

郷土資料館内 展示	春の収蔵資料展《『ちいさい桶』の大きな世界 ほか》 内容：1911年（明治44）年に長崎村で生まれ育った田島五郎氏が、幼少のころよく聞いた話である、『ちいさい桶』を紙芝居にして再現（絵は版画家 平岡望見氏）。	4月17日(金)～6月28日(日)
	夏の収蔵資料展《戦争を考える夏2015》 内容：戦後70年を迎え、近年寄贈された資料や写真を中心に紹介。スガモプリズン関係資料、戦中戦後の区民生活に関する資料、戦後の焼け跡の写真ほか。	7月10日(金)～8月30日(日)
	秋の収蔵資料展《池袋ヤミ市と戦後の復興》 内容：立教大学・東京芸術劇場・区の共催による戦後70年企画「戦後池袋—ヤミ市から自由文化都市へ—」の一環として、池袋ヤミ市の模型、関係資料、写真を紹介。	9月14日(月)～11月29日(日)
3分野 (郷土、美術、 文学・マンガ) 連携展示	庁舎まるごとミュージアム 会場：豊島区役所新庁舎内 3階、4階一部、9階の通路 内容：美術、文学・マンガ、郷土の3分野の収集作品資料と調査研究の成果をパネル等で紹介。	5月7日(木)～
	3分野合同企画展 豊島区ミュージアム開設プレイベント（第3回） 会場：豊島区役所新庁舎 1階センタースクエア 内容：3分野の収集作品資料を中心に紹介、郷土学習の体験展示コーナーも予定。	2016年1月29日(金)～2月5日(金)予定
館外出張 展示	東京区政会館パネル展示 会場：東京区政会館エントランス部分 内容：郷土資料館・雑司が谷旧宣教師館の紹介、(仮称)鈴木信太郎記念館開設に向けての取り組みなどについて、写真・図版等を用いてパネル展示を行う。	11月6日(金)～26日(木)
講座・講演・ 見学会など	郷土資料館展示みどころ解説 内容：郷土資料館の学芸スタッフが月がわりで登場し、わかりやすく展示を解説。	4月25日・5月23日・6月27日・7月25日 8月22日・9月26日・10月24日・11月28日 毎月第4土曜日の14時から40分程度
	第10回新池袋モンパルナス 西口まちかど回遊美術館関連事業 講義とまち歩き アトリエ村さんぽ道「護国寺に眠る美術史の謎—原田直次郎と太平洋美術学校」 講師：本田晴彦氏（アトリエ村資料室代表） 会場：勤労福祉会館4階研修室2ほか	5月19日(火)
	3分野連携事業 第2回「豊島ミュージアム講座」 豊島区ミュージアム開設プレイベント（第4回）	2016年2月～3月(予定) 全5回実施予定
刊行物	豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより「かたりべ」116号～119号	年4回発行、2200部、無料頒布 7月・9月・12月・3月刊行予定
	研究紀要「生活と文化」第25号 付・2014年度年報	3月刊行予定
臨時休館	展示替えに伴う休館①	4月14日(火)～16日(木)
	展示替えに伴う休館②	6月30日(火)～7月9日(木)
	展示替えに伴う休館③	9月1日(火)～13日(日)
長期休館	勤労福祉会館改修工事に伴う休館	2015年12月～2017年9月(予定)

※都合により事業内容や日程を変更する場合があります。

※事業の詳細は、『広報としま』または当館のホームページで随時お知らせいたします。

※当館の収蔵展示室は、2013年4月より新館移転準備作業室として使用しております。そのため、現在の展示スペースは、エレベーターホール部分と常設展示室部分のみとなっておりますので、ご了承願います。

編集後記

『かたりべ』一一六号をお届けいたします。今年度も年四回の発行を予定しておりますので、ご愛読のほどお願い申し上げます。

さて、豊島区立郷土資料館は、昨年度で三〇周年を迎えました。これはひとえに皆様のご協力とご支援によるものと感謝の念に堪えません。本年度は、勤労福祉会館の改修にとり、展示室や事務所だけでなく、収蔵庫内の資料も含め、一時移転することになりました。

本来ならば、(仮称)芸術文化資料館として、新しい豊島区庁舎とともに区民の皆様にお披露目するところでしたが、ご周知の通り長期凍結となつてしまいました。

当分の間、郷土資料館は、展示規模を縮小させていくことになり、貴重な資料を皆様にご覧いただけたいことは、非常に遺憾なことであることと受けとめております。

地域の学習や観光にも教材や資源として寄与し、地域の博物館の役割を存続するために、この『かたりべ』がより多くの皆様のお手に取っていただき、調査・研究や学習活動に役立てていただけたらと思う職員一同、精進し続けたいと思っております。

(編集 高木)

かたりべ
No.116

2015年7月1日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>